



ドリスタ メンズカップ2020

9月24日/ドリームスタジアム太田

ダブルハンド時代への先鞭！ 新城一也が会心の初タイトル

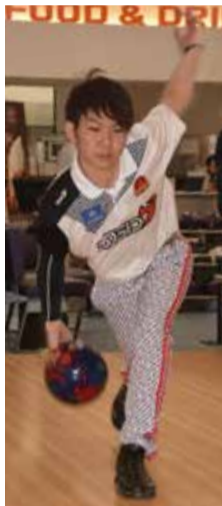
新型コロナウイルス禍の影響でプロトーナメントの中止、延期が相次ぐなか、救済トーナメントとして急きょ誕生した『ドリスタ メンズカップ 2020』。男子レギュラーツアーの今季開幕戦となったその大会を制したのは、21歳の若武者・新城一也（55期・STEEL SPORTS）。またレギュラーツアーでJPBA所属の両手投げプロの優勝は初で、新たな胎動を感じさせる大会となった。（主催：ドリームスタジアム太田／（公社）日本プロボウリング協会）

▶JPBAでは既に数年前から両手投げボウラーが席巻しているが、JPBAにも両手投げ時代の到来を予感させる新城の優勝だった



ドのあとの2回戦で渡邊航明に259:202で屈したが、残る3名は順当に2、3回戦を突破して準決勝に駒を進めた。

準決勝の第1試合は、危なげなく勝ち上がった水野と、2回戦は4ピン差、3回戦は7ピン差と、接戦を制してきた新城の対戦。水野は8フレ、9フレと2度のスプリットメイドを含むノーミ



「レギュラーツアーではこれが初の賞金獲得の松浦。『たまたまといわれたいように頑張りたい』」

スで200とまとめたが、9フレからオールウェーの新城が3ピン逆転して勝ち進んだ。第2試合は、これまで目立った実績のない伏兵・松浦と、3回戦で藤井信人を235:234と1ピン差で下した渡邊の対戦。中盤までは互角だったが、松浦が7フレからのフォースで212:177と突き放した。優勝決定戦は、5フレ④⑦⑩のスプリットでつまずいた松浦を、新城はすかさず6フレからのターキーで突き



「いい感じで投げられていただけに、準決勝9フレの失投が悔しい」と水野

放し、225:199で悲願の初タイトルを獲得した。昨年の新人戦で両手投げの森元洋行が



準決勝進出の4人では唯一のタイトルホルダーだった渡邊だが、序盤のミスが響いて4位

優勝したが、レギュラーツアーで両手投げの優勝は新城が初めてだった。

新城のコメント

ウレタンボールの方が収まってくれたので選択したけど、大会を通じてウレタンを使い続けたのは初めて。決勝に入ってピンが飛ばなくなり、リアクティブに替えるべきか迷ったけど、我慢強くスピアを拾うことに徹した。両手投げでレギュラートーナメントの優勝が初というのはそんなに意識していなかったけど、初タイトルはめちゃくちゃうれしい。（優勝ボール：STORMピッチ・ブラック ROTOGRIIPホットセル）

●優勝決定戦

松浦 和彦	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	29	49	68	85	93	120	140	159	179	199
新城 一也	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	17	37	66	86	106	136	165	185	205	225

今大会には72名が出場、予選(6G)、準決勝(4G)の10Gトータル上位24名が決勝トーナメント(1Gマッチ)に進んだが、先の新人戦で準Vの佐藤貴啓(57期)がトップ通過、水野耕佑(56期)が2位、新城一也が3位、松浦和彦(56期)が4位など、若手の健闘が目立っていた。そのうち佐藤は1回戦をシ



藤村 隆史 TAKASHI FUJIMURA

回り道して覚醒したボウラーの遺伝子

プロ3年目、26歳の藤村プロ。今年8月、ラストチャンスで初タイトルを獲得し、早くも公式戦未勝利の父・重定プロ(4期)超えを果たしたが、その道程は「2世プロ」らしい真っすぐな一本道ではなく、意外にも曲がりくねった「長くて遠い道」だった――。

(PHOTO: 福地和男/取材協力: ドリームスタジアム太田)

「投げているうちに『あれ、隆史じゃん!』と昔の仲間が気づいて声をかけてくれて(笑)。帰ってその話を父にしたら『藤村隆史をアピールできるのはボウリングなんだぞ』と言われて、改めてそれを実感しました」

趣味の一環として再開したつもりが、以前のクラブ長の計らいで休会扱いになっていたJBCに復帰すると、仲間にも勧められて「PBAジャパンインビテーショナル2015」予選大会に出場。同大会決勝ラウンドまで勝ち進んで3位入賞を果たしたことで、ようやく進むべき道が定まった。

当初はナショナルチームを目指したが、選考会で落選。「次の選考会まで2年待つか、プロテストを受けるか」で悩んだ結果、後者を選択し、57期のプロテストでトップ合格を果たした。回りまわって子どものころの夢に回帰し、父から受け継いだ「ボウラーの遺伝子」が覚醒した瞬間だった。

昨年(現在は山梨石和店勤務)となり、プロ活動優先の環境を得て成績も上昇。関西オープン27位、全日本選手権23位などで、ポイントランキングは1年目の197位から60位に、アベレージも202.4→207.74と5点以上アップした。

シード入りも見えてきた今季は、コロナ禍で大会の中止・延期が相次いで勢いに水を差された格好だが、来季と連結して1シーズン扱いされることになり、「今後予定どおりに開催されれば例年より試合数は増えるので、その分チャンスも多い」とポジティブに捉えている。また、2カ月近くに及んだ自粛・休業期間も「ボウリングに対する気持ちがリセットできてよかった」という。

「新人戦はポイントが付かないけど、優勝という結果を残せたので、ミスが減らしてシード入りは確実に狙っていきたくて思っています」



新人戦V当時の藤村プロ。会場のドリスタとはずいぶん相性がいい(8月29日)

実は今年、東京オリンピックが予定どおり開催されていたら、「チームコカ・コーラ」が選ばれた聖火ランナーの一員として、山梨県下の聖火リレーを走ることにもなっていた。

「職場の仲間と一緒に応募したんですが、プロボウラーと書いて送ったら通っちゃって(笑)。来年開催されて聖火リレーもやることになれば、優先的に走らせてもらえるらしいので、実現して少しでもボウリングをアピールできたらうれしいですね」

令和のボウリング界をけん引していく自覚は十分だ。

ふじむら・たかし / 1994年3月15日生まれ、静岡県出身。173センチ、63kg、右投げ。血液型A。2018年プロ入り(57期/ライセンスNo.1394)。優勝1回。昨年度ポイントランキング60位、アベレージ207.74。ラウンドワン/ABS所属。

サッカー王国・静岡に生まれ、小学校時代は自身もサッカーに興じたが、ボウリング以外の球技はあまり得意ではなかったという。

「跳び箱は高いのが跳べたし、「前宙」なんかもできたから、運動神経は悪くないと思うんですけどね(苦笑)」

ボウリングを始めたのは小3のとき。父親から基本的な指導を受け、瞬く間に腕前を上げた。何より投げるのが楽しく、ごく自然に「プロボウラー」としての将来を思い描くようになったが、その夢は中学生時代に一度霧消してしまう。JBCに入会してジュニアの競技会に参加していたが、周囲の期待を

背負って投げるプレッシャーに、ボウリングを楽しむ気持ちがそがれてしまったことが原因だった。

卒業と同時にボウリングを離れ、高校時代にはダブルダッチ(2本のロープを使う縄跳び)やブレイクダンスに熱中。K-1ファイターである5歳年上の兄・大輔さんの影響を受けて、格闘技をかじった時期もあるという。

20歳のとき、ふと思い立って昔使っていたボールを引っ張り出し、ジュニア時代に通い慣れた藤枝グラウンドボウルへ。約5年のブランクがあっても、カラダはボウリングを覚えていた。